

# 北海道研究林標茶区におけるエゾシカ目撃記録 (2010~2013)

北海道研究林 北川陽一郎

## 1. はじめに

北海道研究林標茶区では 2010 年度からエゾシカの生息実態と植生への影響を追跡することを重点目標として野生動物のモニタリングを行っている (林 2012)。モニタリング項目のひとつであるエゾシカ目撃記録調査は、特別な人工をかけずに 1 年を通して全林道・作業道の目撃記録を継続的に収集できる利点がある。今回は 2010 年 6 月から 2013 年 12 月までのエゾシカ目撃記録調査をまとめた。

## 2. 調査地

北海道研究林標茶区の植生は落葉広葉樹からなる天然林とカラマツ、トドマツなどからなる針葉樹の人工林で構成されている。標茶区の面積は 1,446ha で、そのうち約 420ha が人工林となっている。林床にはササが広がっている林分が多い。地形は東端が別海町に続く台地で、西側の多和川支流によって作られた低湿地まで緩やかな斜面で連なっている。研究林北部の周辺は大規模な牧草地で、研究林南部は東側に広がる針葉樹の人工林とつながっている。

## 3. 方法

北海道研究林標茶区内の林道・作業道でエゾシカを目撃した場合に、車載の目撃カードに記録した。記録内容は、日時、場所 (林班または多角点番号)、目撃時のエゾシカとの距離、天候、目撃者、目撃頭数、角が確認できた頭数、角の形態 (不明・大・中・小から選択)、子供の頭数、備考とした。また、目撃の有無にかかわらず林道・作業道を利用した場合は目撃カード裏面に通行路線を記録した。調査期間は各年 5 月から 12 月までとした (2010 年のみ 6 月から 12 月)。

目撃頭数は、エゾシカ目撃総数を総走行距離 (km) で除した値を 10 倍した「10 km あたりの目撃頭数」として処理した。また、林道・作業道を 22 のルートに分け (図 1)、各ルートの 10 km あたりの目撃頭数を集計した。

なお、林道補修時に重機の伴走などで同一ルートを短時間に複数回走行した場合は総走行距離が増加するが、10 km あたりの目撃頭数に大きな影響を与えないことを確認したため、この場合の総走行距離も加えた。

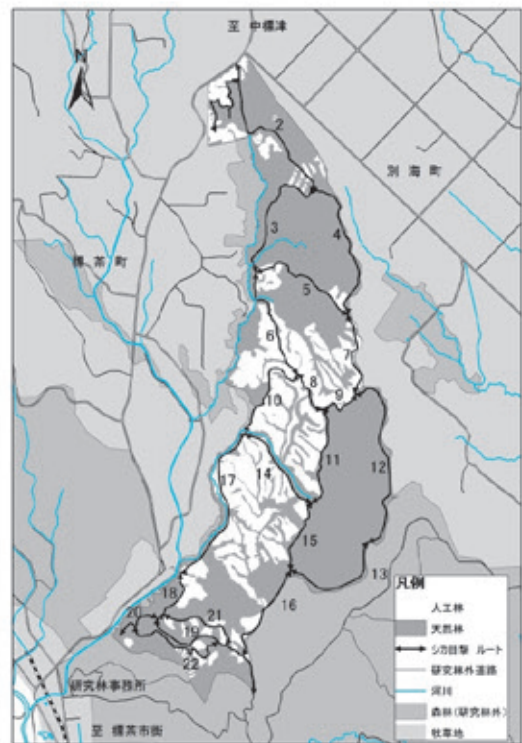


図 1 シカ目撃ルートおよび研究林周辺図

表 1 月ごとの総走行距離 (km)

	2010	2011	2012	2013
5月		340.0	347.6	223.7
6月	211.5	322.7	246.3	200.5
7月	265.2	328.5	342.2	213.7
8月	339.7	337.4	303.4	236.6
9月	279.0	258.2	237.0	149.8
10月	426.6	361.8	338.0	104.2
11月	234.1	311.7	330.6	93.6
12月	242.7	107.7	116.2	41.6

#### 4. 結果と考察

2010年6月から2013年12月までの全ルート総走行距離は7,891.8 km、エゾシカ目撃総数は1,161頭(群れ数519)だった。月ごとの総走行距離を表1に示した。

全ルートにおける月ごとの10 kmあたりの目撃頭数を図2に示した。10 kmあたりの目撃頭数は時期のずれはあるが2010年と2012年の5、6月に顕著に高い値を示した。また、各年9月に高い値を示し、11、12月に低い値を示した。

5、6月は林床のササ丈が低く、見通しが良いため目撃頭数が多くなった可能性がある。また、梶(2006)の電波発信機を使った追跡調査によるとエゾシカは夏の生息地と冬の越冬地を使い分け、春の融雪期に越冬地を発ち、夏から秋に夏の生息地を利用している。月ごとの10 kmあたりの目撃頭数の季節変動は、研究林を夏の生息地とするエゾシカの季節移動を表しているとも考えられるが、他のモニタリング調査

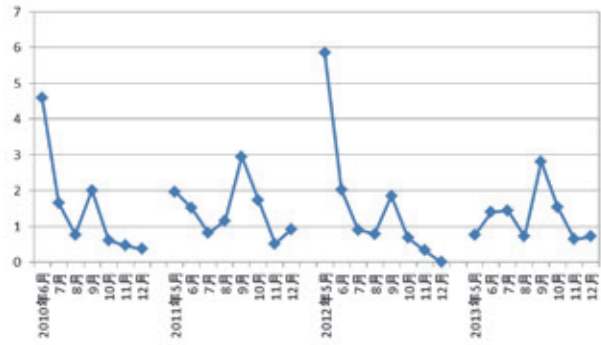


図2 月ごとの10 kmあたりの目撃頭数

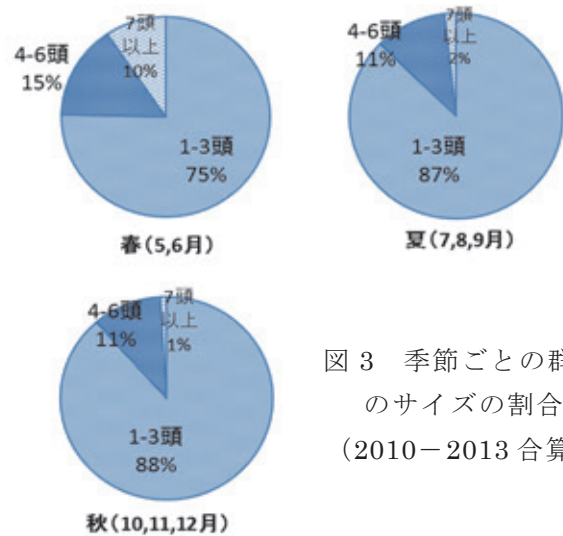


図3 季節ごとの群れのサイズの割合 (2010-2013 合算)

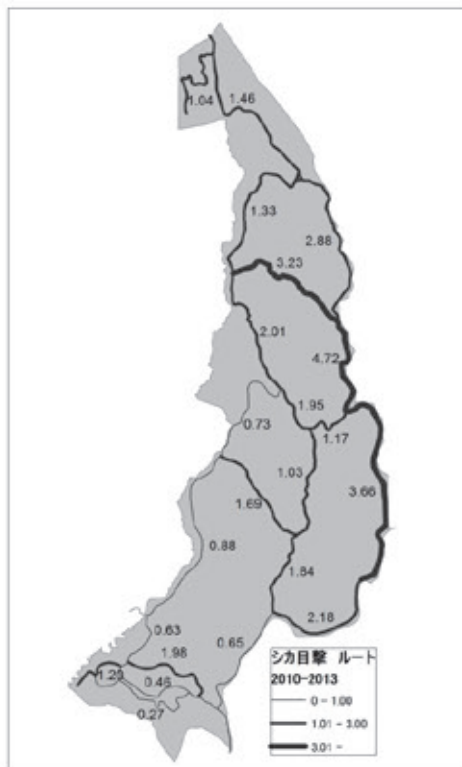


図4 各ルートにおける10 kmあたりの目撃頭数 (2010-2013 合算)

の結果などと総合して慎重に検討する必要がある。

季節ごとに目撃された群れのサイズの割合(2010-2013 合算)を図3に示した。一年を通して1-3頭の群れの目撃が最も多いが、春(5、6月)は4-6頭と7頭以上が合わせて25%を占め、比較的多かった。夏(7-9月)や秋(10-12月)は8割以上が1-3頭の群れで、4-6頭の群れはおよそ1割を占め、7頭以上の群れはほとんど見られなかった。

同じく標茶区で行われたエゾシカ目撃調査(高柳ほか1992)でも4、5月に5頭を超える群れが多く目撃され、越冬群であるとされている。高柳ほか(1992)では6-8月は全ての群れのサイズが3頭未満になり、9-11月は群れのサイズがやや大きい繁殖期のハーレムが目撃されているが、本調査では夏と秋で目立った群れのサイズの変化はなかった。

各ルートにおける 10 km あたりの目撃頭数（2010-2013 合算）（図 4）は、研究林南部のルートで比較的低い値を示し、研究林北部で比較的高い値を示した。特に研究林北部東側の牧草地に沿ったルート（ルート番号 7、12）の値が高かった。

梶（2006）によると牧草地の牧草はエゾシカにとって無雪期の重要な餌であり、研究林内に生息するエゾシカは研究林周辺の牧草地で餌を食べていると思われる。したがって、周囲を牧草地に囲まれた研究林北部や牧草地に沿った研究林北部東側で目撃が多くなる一方で、牧草地との間に森林や湿地、道路を挟む研究林南部で目撃が少ない可能性がある。

今後も継続的に目撃記録を収集するとともに、他のモニタリング調査の結果と組み合わせることで北海道研究林標茶区における長期的なエゾシカの生息動向を把握したい。また今回の調査では、エゾシカ目撃地点を目撃カード裏面（林道・作業道を示した白地図）に落とす方法をとったため、詳細な位置を特定することが難しかった。しかし、2014 年 4 月からは GPS を用いてより細かなエゾシカの行動を特定することを試みている。

最後にこの調査は、北海道研究林の技術職員をはじめ、多くの教職員や研究林利用者の協力により行われた。ここに深く感謝申し上げます。

## 引用文献

林大輔（2010）野生動物のモニタリング開始. 研究林・試験地情報 2010（平成 22）年度 29-32.

梶光一（2006）第 2 章 分布と生態.（エゾシカの保全と管理.梶光一・宮木雅美・宇野裕之編、北海道大学出版会、北海道）11-17.

高柳敦・山内隆之・合田好廣・谷口直文・大窪勝・柴田正善・松下幸司（1992）北海道演習林標茶区におけるエゾシカ目撃記録.京大演報 23：10-21.